
I S —過去より受け継がれし霊石（いし）—

IZUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ―過去より受け継がれし^{いし}霊石―

【Nコード】

N1182Y

【作者名】

IZUMI

【あらすじ】

親の職場に社会見学、そこまではよかったが事故を引き起こしてしまった。

作者が不器用なのでどうなるかわかりません。どうか暖かい目で見てください。

プロローグ：非日常への憧れ（前書き）

お手柔らかにお願いします。

ブログ：非日常への憧れ

IS

正式名称『インフィニット・ストラトス』こいつは宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。

しかし『制作者』の意図とは異なり、宇宙進出は一向に進まず、結果としてはこのスペックを持て余した機械は『兵器』と変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた——飛行パワードスーツ——

それは中学三年の夏休みに起きた。

その時俺は、一人で両親の勤め先であつたとあるIS関連企業に社会見学という形で来ていた。

親の仕事を知ることとは悪いことではない。社会見学だからと大人達は快く受け入れてくれた。

見学には広報の人が付いてくれた。ISの構造や製造行程などを説明してくれた。最後には純国産のISである『打鉄』を見ることが出来た。

「あの、これ触っていいですか？」

「ええ、それにしても残念ね、そんなにISの事が好きなのに操縦が出来ないなんて」

「いいんですよ、動かせなくても武器の設計や本体の設計は出来ますから」

ちなみにだが、このISという機械、重大な欠点がある。

「君が男の子じゃなければ動かせるのにね」

そういうことだ、簡単に言うとな性にしか使えない。

俺は男だから触れても何の反応もしない。このまま一生こいつらに関わることは無い可能性もある。そう思いながら触れた。

簡潔に言おう起動させちまったのだ。男であるはずの俺が。それと同時に胸元が一瞬光り輝いた。

当たり前のように捕縛。政府の力で自宅軟禁状態を余儀なくされた。しかし俺はそんなことよりもっと別のものの事で頭がいっぱいになっていた。

（なぜあんな所で光ったんだ？）

俺は常に持っているものがある。葬式の時に祖母ちゃんから貰った祖父ちゃんのペンダントだ。

そのペンダントトップは、シルバーの網の中に5cm程のクリスタルが入ってるようなデザインだ。

それをくれるときに祖母ちゃんから言われたことを思い出した。

『お前さんにこれをやろう。祖父さんの形見だから大事にするんだよ。』

ここまでは、普通だった。

『これが光ったときは、触っていた武器が、これからお前さんの運命の武器になるだろうね。』

何を言ってるの？まだ葬式中なのに。

『もしものときだよ。もしもそのようなことがあれば、それを離してはダメだよ。』

再び両親の職場。

今回は、俺の隣には両親。政府のお偉いさん方も揃っている。

クリスタルの話を両親にした。祖母ちゃんも入ってくれた。

そいつが必要なんだ。っと一言。流石に信じてはくれなかったが、もう一度会うことを許してくれた。

目の前には以前と同じようにそいつがいる。

「久しぶりだな。前の事が本当ならもう一度見せ付けてくれよ。」

再び光りに包まれた。

男が二人だけ？ P a r t 1（前書き）

原作どおりにある程度進めたいと思っています。

男が二人だけ？ Part 1

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑んでいる女性教師は、山田真耶先生。副担任だそうだ。（さっき自己紹介をしてくれた。）

身長は目測であるが少し低いようだ。だいたい生徒と変わりが無い程度に。それにしても服がダボツとしているし、かけている黒縁メガネもやや大きめのようで、若干ズレている。

全体的に言っと、『大人ものを無理して身につけた子供』的な不自然さがある。そこは、もう気にしないでおこう。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

異様な緊張感が漂う教室に、彼女の一言は消えていった。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
ちよつとうるたえている副担任が可愛そうだから少しくらい反応をしてあげたいが、そこまでの余裕が無い。

なぜか。

教室の中に男子は二人しかいない。後は女子なのだから。

今日は高校の入学式。新しい門出であり、むしろ喜ばしい日だ。

問題は、男が俺以外に男子は一人しかいないことだ。

（きつい、きつすぎる。）

自信過剰と思われたくないのだがほぼ全員からの視線を感じる。

彼とは席が若干離れている。彼からすると窓側斜め後方となるわけだが。それだからか、前方の生徒がたまに見てきたりする。とても

しんどい。

目の前の席に、視線を持って行く。

「……………」

薄情な元居候の篠ノ之箒は、窓の外を見ている。約二年ぶりの再開なのだが、嫌われたか？斜め前の彼もすぎるように箒を見ていた。知り合いか。

「……織斑くん、織斑一夏くん。」

「は、はい。」

すっかり忘れていたが、自己紹介の途中だった。

織斑一夏、俺以外の唯一の男だ。

後ろを振り返り、

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

その言葉の後、儀礼的に頭を下げた。それでいいだろうと思っただ、周囲の連中がそれを許さないようだ。

それは、この直後の俺を案じているようだった。

彼はこのまま動きそうもないから、回想の続きといこうか。

結局、俺はお偉いさん方の前で歩き回ったり空中停止などをやつてのけていつの間にか、初期化と最適化をいつの間にか終わらされて打鉄にベルト状のモノが出来ていてバツクルに形見のあの石が、埋め込まれて入れ込まれたになってしまった。

自分の専用機を持ってしまったわけで、再び捕縛というか本格的に軟禁となってしまった。

時は進み二月。有り難いことに織斑一夏が受験会場で動かしてくれた事で彼の報道を各社ビックニュースとした。そのおかげでゆっくりとすることが出来た。

「以上です」

多分考えたが何も出なかったのだろう。

がたたつ。思わずずっこけた女子が何人かいた。俺は正解だと思う特にいい事があれば。

パアンツ！いつの間にか彼の後方に黒のスーツにタイトスカートで

すらりと背の高い女性教員がいた。

「げえっ、関羽!？」

パアンツ! また叩かれている。それにしても叩かれすぎではないか？

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーンの低めの声。目つきも鋭い。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてしまつてすまなかつたな」

彼への対応とは一変優しい声になった。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

先ほどの涙声はどこへやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応えている。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者にはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんと! 自己紹介で恐怖政治発言!

しかし、周囲の女子からは困惑した俺と異なり黄色い声援が響いた。

「キャ——! 千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずつとファンでした。」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです! 北九州から!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです!」

「私、お姉様のためなら死ねます!」

きやいきやいと騒ぐ女子達を、織斑先生はうつうつしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。それとも何か? 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか?」

織斑千冬。彼女は第一世代型ISの操縦者であり、モント・グロ第一回IS世界大会にて総合優勝および格闘部門優勝の結果を残している。そこら

にいる女子が慕うわけだ。

しかし、いつの間にか引退してしまった。そこまで競技のほうには興味が無いから知らないが。

「きゃあああああつ！お姉様！もつと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして！」

ちなみにだが、彼女は「ブリュンヒルデ」と呼ばれている。モンド・グロッソで総合優勝したからだそうだ。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は——」

パアンツ！本日三度目。よく叩くねこの人は。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

——そういうことなのだろう。つまり——

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

そう言うことであろう。

「それじゃあ、男で『IS』を使えるのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

最後のを聞かなかつた事にして、改めて言っておく。

俺達二人は今、世界で二人だけの『IS』を使える男としてここ、公立IS学園にいる。

IS学園とは、IS運用協定に基づいたIS操縦者を育成する教育機関だ。ここの資金源はすべて日本国が持つことになっている。そしてこの施設にかかわる問題や事故は協定に参加している国に説明がしっかり出来るように日本国は公平に介入しなければならない。その割には学園内にて得られた技術は、協定に参加している国に公開しなければならない、それらの国の国籍を持っている人は、無条件に入学の機会を与えることや、それらの人の日本の生活を保証しなければならない。

ひど過ぎやしないか日本への対応が。

まあ、今この一国民で特に力もない少年が、なんやかんやいつても世界が変わるわけがないが……。

しかし、俺には少し気になることがある。俺はIS関連施設で、織斑はIS学園の試験会場で、ISを動かしたからここにいるわけなのだが。俺は仕方がないかもだけど、一夏は何でそんな所にいたんだ？ 後で聞いておくか。

「……くん。玉森海瑠くん」

「は、はい」

やばい、まだ自己紹介してない。

「全くここにいる男どもは、ぼつとしてるな」

織斑先生からは、ため息混じりの呆れたような声が出てきた。

「はい、すみません。すう。玉森海瑠です。これからよろしく願います。」

儀礼的に頭を下げて上げて座る。織斑のように物足りないような視線を受けたが、無視した。

残りの自己紹介も終え、SHRも終わった。他の人の自己紹介か？ 自分の事でいっぱい耳に入らなかったよ。

男が二人だけ？ Part 2

斜め前で男子生徒が潰れて、目の前では元居候が難しい顔をしながら考え込んでいる。

今は一時間目のIS基礎理論授業が終わった休み時間。しかし、この教室には異様な雰囲気包まれている。

とりあえず言っておくが、IS学園ではコマ限界までIS関連授業を入れている関係上、入学式当日から普通に授業がある。学内の案内なんかはない。地図を見ろだそう。

「よっ、篝。久しぶりだね。一年間半ぶりかな？」

初めに声をかけやすい目の前の元居候に肩を叩きつつ声をかけた。

「っわぁ！！な、なんだ、お前か。いきなり声をかけるな、びっくりするだろう！！」

元居候の驚いた声は、クラスに響いた。相変わらずの男のような口調だ。

彼女の名前は、《篠ノ之篝》。とある大人の事情とやらで短い間ではあったが、俺の家に一緒にすんでいたヤツだ。髪型は一貫してポニーテール。髪なんか肩下までいつている。

身長は平均的なのだがどこか長身を思わせる。スタイルがいいのだから？

「あ、ゴメン。とりあえず、久しぶりだから挨拶をと思ったんだけど……」

「そ、そうか……」

「前に話してた『離れ離れになっちゃった幼なじみ』って、あそこでへたってる人でしょ」

「……あ、ああ」

顔を下げた難しい顔をしている。

「僕も声をかけたかったから、一緒に来てくれるかな？」

「な、なんで私も……」「長い間あつてなかったんでしょ。ほら、行くよ。」

箒の腕を掴む、つかこのあほ、立とうとしない。しゃーない、この手を使うか。

「織斑一夏！！暇なら少し話さないか！？」

教室全体に聞こえるんじゃないかと思えるほどの声。そこにいる全員に聞こえるほどの声。

「ああ、いいぜ。少し待ってくれ。」

反応あり。更に来てくれることになった。箒、逃げるなよ。

「玉森海溜です、初めまして。海溜って気軽に呼んで」

「ああ、俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ」

挨拶に握手をした。男は俺達二人だけだから仲良くしなきゃな。

「……わ、私もいる」

後ろから声がした。間違えなく箒のもののだが、弱気過ぎやしな
いか？

「おう、箒。久しぶりだな」

「そ、そうだな」

「六年ぶりだけど、箒ってすぐにわかったぞ」

「え……」

六年も離れててすぐにわかるなんてそうそう無いぞ。女の子だから
体も代わるだろうし。

「よ、よくも覚えているものだ……」

「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」

「……………」

箒は一夏をおもいつきり睨みやがった。なにか地雷を踏んだみたい
だ。俺も気をつけよう。

キーンコーンカーンコーン。

二時間目の開始のチャイムがなった。廊下にいた生徒はもうほとん
どいなくなっている。さすがES操縦者行動が俊敏だ。

「一夏、僕達も席につかないとね。」

「ああ、じゃあ後で。」

まあ、それでも遅かったらしい。理由は……..
パアンツ！パアンツ！

俺と一夏が、織斑先生の一撃を喰らったから。

「とつとと席に着け、馬鹿者ども」

「……………は、はい」

「……………ご指導ありがとうございます、織斑先生」
スゲー痛かった。

「ちよつとよろしくて？」

「へ？」

「え？」

二時間目の休み時間がはじまって、一夏と話そうとした時、知らない声に素っ頓狂な声を出してしまった。へ、二時間目のこと？授業は辛かったよ。教科書五冊が詰まれて、取り合えず山田先生の話を横目で聞きながら、すべてに目を通して、現時点で意味がわからないところを線で引いたりしてた。

その間には、一夏が電話帳みたいな入学前の参考書を古い電話帳と間違えて捨ててたのが判明。本日五発目を喰らったわけで……メモ帳の正が一つ出来た。

そして、山田先生は山田先生で妄想から帰還でき無くなりかけて、楽しいくらいに大変だった。

回想はここらにしておいて、声をかけてきたのは地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通るようなブルーの瞳が、ややツリ上がっている状態で俺達を見ていた。何でこう話し掛けて来るヤツは不機嫌そうなのかね？

わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、

彼女の雰囲気も今の女子をたいげんしている感じた。

今の世の中、ISのせいで女性はかなり優遇されている。優遇を通り越して女々しいの構図まで出来てしまった。そうなると男の立場は完全に労働力ということなる。今では町ですれ違っただけの女にパシリにされる男の姿は珍しいものではない。

そしてここにはそのような現代っ子がいるわけで、腰に当てた手が様になっている様子から、彼女自体もかなりな身分なのかも知れない。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういうようだ？」

「訊いてるよ、なに？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないのでしょうか？」

「……………」

しらねーよそんなもん。こういうやつは、いつになっても慣れられない。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「まあ！」

一夏の言葉をきいて彼女は声をあげた。

「ゴメン。僕も全く」

俺の口からも彼女が満足する言葉は出なかったようだ。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のわたくしを！」

尋ねなくてもよかったみたいだ。セシリア・オルコットか……、面倒臭さそうだが悪いヤツではなさそうだな。とりあえず自己紹介と。

「初めまして。玉森か……。」

「知ってますわー！」

さいですか。

「まあ、いいや。よろしくね。」

「……………」来たよ。なんだよその身分の違いをわきまえろみたいな視線は。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々の要求に応えるのも貴族の勤めですわ。よろしくてよ」「代表候補生つてなに？」

「がたたたつ。わぁー、吉本新喜劇みたいにみんなこけた。」

「あ、あ、あ……………」

「『あ』？」

「ハァー。」

「あなたつ、本気でおっしゃってますの!？」

「やっぱりキレルよな。彼女達代表候補生は、地位画一のために日々精進していると聞くし。」

「おう、知らん」

「織斑一夏。君はもう少し表意文字の特性を理解すべきだ。」

「……………」

しかし、何事も一周すれば落ち着くようで、彼女は、頭を押さえながらぶつぶつと言いはじめた。

面白そうだ。みてみよう。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、ここまで未開の地なのかしら……………」

「ああ、なんだ、呆れただけなんだ……………。一夏。代表候補生つて言うのは、国家代表のIS操縦者の候補者にあたる人達なんだよ。その国の中で選ばれた人つてわけだね」

「ああ、なるほどな」

彼は天然なのか？

「そう！エリートなのですわ！」

あ、彼女が復活をした。なんでだ？……………ああ、『選ばれた人』」「『エリート』、ととったわけか。」

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくす

るだけで奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少しは理解していた
だける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「まあ、そうだね」

笑顔で同意。

「……馬鹿にしていますの？」

ああ、だって俺はあんたに興味は無いし。

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた方のような人
間にも優しくしてあげますわよ」

そりやどうも、期待はしないが。

「ISのことわからなかったことがあれば、まあ……泣いて頼まれた
ら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官
を倒したエリート中のエリートですから」

自慢話のところ残念だが………。

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

ああ、可愛そうに。相当ショックなのかセシリアは目を見開いてい
る。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？あ、あなたは？」

教官を倒していないことを願うように俺に訊ねてきた。答えは決ま
っている。

「ごめん。僕も倒したはずだよ、教官は」

ピシッと変な音がした気がする。ガラスにヒビが入るときみたいな

……

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「ええっと、多分」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「ねえ、とりあえず落ち着こうよ。しんこきゅ——」

「こ、これが落ち着いていられ――」

キンコーンカーンコーン。

セシリアの言葉を封じたのは、チャームだった。昼休みや放課後でなくてよかった。いつまで続くか知ったもんじゃない。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

こういう人ほどめんどくさいと理解した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1182y/>

I S —過去より受け継がれし霊石（いし）—

2011年11月17日20時31分発行